

日蓮大聖人御書全集

おおたにゆうどうどのごへんじ

太田入道殿御返事

新版
1358
〜
1363

おおたにゆうどうどのごへんじ

太田入道殿御返事

けんじがんねん

建治元年(75)

がつ 11月3日

さい

54歳

大田乗明

おおたじようみよう

きさつ

ひら

はいけん

おんいた

ひと

なげ

貴札、これを開いて拝見す。御痛みのこと、一たびは歎き、

に よろこ

二たびは悦びぬ。

ゆいまきつきよう

い

とき

ちようじや

ゆいまきつ

みずか

おも

維摩詰経に云わく「その時、長者・維摩詰、自ら念え

い

とこ

や

とき

ほとけ

もんじゆしり

つ

らく『寝ねて牀に疾む』。その時、仏、文殊師利に告げた

なんじ

ゆいまきつ

ぎようけい

やまい

と

うんぬん

まわく『汝、維摩詰に行詣して疾を問え』と云々。

だいねはんぎよう

い

とき

によらいなしいしみ

やまいあ

げん

大涅槃経に云わく「その時、如来乃至身に疾有るを現じ、

みぎわき

ふ

か

びようにん

うんぬん

ほけきよう

右脇にして臥したもう。彼の病人のごとくす」云々。法華経

い しょうびようしょうのう うんぬん しかん だいはち い びや
に云わく「少病少恼」云々。止観の第八に云わく「毘耶

えんが やまい たく おし おこ ないしによらい
に偃臥するがごときは、疾に託して教えを興す乃至如来は

めつ よ じょう だん やまい よ ちから と うんぬん
滅に寄せて常を談じ、病に因つて力を説く」云々。

い やまい お いんねん あ むつ あ いち
また云わく「病の起こる因縁を明かすに、六つ有り。一に

しだい じゆん ゆえ や に おんじき せつ
は四大の順ならざるが故に病む。二には飲食の節ならざる

ゆえ や さん ぎぜん とこの ゆえ や し きたよ
が故に病む。三には坐禅の調わざるが故に病む。四には鬼便

う ろく ま しよい ろく ぎょう お ゆえ や
りを得。五には魔の所為なり。六には業の起こるが故に病む」

うんぬん だいなはんぎよう い よ さんにな やまい じ がた
云々。大涅槃経に云わく「世に三人のその病治し難きもの

あ いち だいじよう ぼう に ぎやくてい さん
有り。一には大乘を謗ず。二には五逆罪あり。三には

いっせんだい

さんびよう

よなか

ごくじゆう

一闡提なり。かくのごとき三病は、世の中の極重なり」

うんぬん

い

こんぜ

あくごうじようじゆ

ないしかなら

まさ

じごく

云々。また云わく「今世に悪業成就し乃至必ず応に地獄な

ないしさんぼう

くよう

ゆえ

じごく

お

げんぜ

るべし乃至三宝を供養するが故に、地獄に堕ちずして現世に

むく

う

ごうぶ

め

せ

いた

とううんぬん

報いを受く。いわゆる頭と目と背との痛みなり」等云々。

しかん

い

じゆうざいあ

ないしにんちゆう

かる

つぐな

止観に云わく「もし重罪有るも乃至人中に軽く償う。こ

ごう

しゃ

ほつ

ゆえ

や

うんぬん

れはこれ業の謝せんと欲するが故に病むなり」云々。

りゆうじゆぼさつ

だいろん

い

と

い

竜樹菩薩、大論に云わく「問うて云わく、もししからば、

けごんきようないしはんにははらみつ

ひみつ

ほう

ほつけ

華嚴経乃至般若波羅蜜は秘密の法にあらず。しかるに法華

とう

ないしたと

だいやくし

よ

どく

へん

くすり

等は乃至譬えば、大薬師の能く毒を変じて薬となすがごと

し」云々。天台、この論を承けて云わく「譬えば、良医の能

うんぬん てんたい ろん う たい しょうい よ

く毒を変じて薬となすがごとし乃至今経に記を得るは、

すなわ ぞく へん くすり ないしこんきょう き う

即ちこれ毒を変じて薬となす。故に、論に云わく『余経は

ひみつ ほつけ ひみつ へん くすり ゆえ ろん い よきょう

秘密にあらず、法華を秘密となす』と」云々。止観に云わ

ほつけよ じ しょう みよう うんぬん みようらくい

く「法華能く治す。また称して妙となす」云々。妙楽云

じ がた よ じ みよう しょう うんぬん

わく「治し難きを能く治す。ゆえに妙と称す」云々。

だいきょう い とき おうしやだいじょう あじやせおう しょうへいあく

大経に云わく「その時、王舎大城の阿闍世王その性弊悪

ないしちち がい お こころ けねつ しょう ないしこころ け

にして乃至父を害し已わって、心に悔熱を生ず乃至心悔

ねっ ゆえ へんたい かさ しょう かさ しゆえ ふごん

熱するが故に、遍体に瘡を生ず。その瘡、臭穢にして附近す

べからず。その時、その母にして韋提希と字づくるものは、

種々の薬をもつてためにこれを傳く。その瘡、ついに増し

て降損有ることなし。王即ち母に白す。『かくのごとき瘡は

心に従つて生ず。四大より起こるにはあらず。もし衆生

に能く治する者有りと言わば、この処有ることなけん』と

云々。「その時、世尊・大悲導師、阿闍世王のために月愛三昧

に入り、三昧に入り已わつて、大光明を放ちたもう。その光、

清涼にして、往つて王の身を照らすに、身の瘡即ち愈え

ぬ」云々。平等大慧の妙法蓮華経の第七に云わく「この経

べからず。その時、その母にして韋提希と字づくるものは、

種々の薬をもつてためにこれを傳く。その瘡、ついに増し

て降損有ることなし。王即ち母に白す。『かくのごとき瘡は

心に従つて生ず。四大より起こるにはあらず。もし衆生

に能く治する者有りと言わば、この処有ることなけん』と

云々。「その時、世尊・大悲導師、阿闍世王のために月愛三昧

に入り、三昧に入り已わつて、大光明を放ちたもう。その光、

清涼にして、往つて王の身を照らすに、身の瘡即ち愈え

ぬ」云々。平等大慧の妙法蓮華経の第七に云わく「この経

べからず。その時、その母にして韋提希と字づくるものは、

種々の薬をもつてためにこれを傳く。その瘡、ついに増し

て降損有ることなし。王即ち母に白す。『かくのごとき瘡は

すなわ

えんぶだい

ひと

やまい

ろうやく

ひとやまいあ

は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり。もし人病有らん

きよう

き

え

やまい

すなわ

しようめつ

ふるう

に、この経を聞くことを得ば、病は即ち消滅して、不老

ふし

うんぬん

不死ならん」云々。

いじよう

かみ

しよもん

ひ

おんやまい

かんが

ろくびよう

已上、上の諸文を引いて、ここに御病を勘うるに、六病

い

なか

ごびよう

お

だいろく

ごうびよう

を出でず。その中の五病はしばらくこれを置く。第六の業病、

もつと

じ

がた

ごうびよう

かる

あ

おも

あ

たしよう

最も治し難し。はたまた、業病に軽き有り重き有つて、多少

さだ

ほつけひぼう

ごうびよう

さいだいいち

しんのう

定まらず。なかんずく、法華誹謗の業病、最第一なり。神農・

こうてい

かだ

へんじやく

て

こまね

じすい

るすい

ぎば

ゆいま

黄帝・華佗・扁鵲も手を拱き、持水・流水・耆婆・維摩も

くち

と

しやくそんいちぶつ

みようきよう

ろうやく

かぎ

じ

口を閉ず。ただ釈尊一仏の妙経の良薬に限つてこれを治

す。

ほけきょう い かみ だいねはんぎょう ほけきょう さ

法華經に云わく、上のごとし。大涅槃經に法華經を指して

い しょうほう きぼう よ みずか かいげ

云わく「もし、この正法を毀謗するも、能く自ら改悔し、

しょうほう げんき ないし しょうほう のぞ

正法に還歸することあらば乃至この正法を除いてさらに

くゝい ゆえ まさ しょうほう げんき うんぬん

救護することなし。この故に应当に正法に還歸すべし」云々。

けいけいだいしい だいきょうみずか ほつけ さ ごく うんぬん

荊溪大師云わく「大經自ら法華を指して極となす」云々。

い ひと ち たお ち お

また云わく「人の地に倒れて、還つて地より起くるがごとし。

ゆえ しょう ぼう じゃ だ せつ うんぬん

故に正の謗をもつて邪の墮を接す」云々。

せしんぼさつ もとしょうじょう ろんじ ごじく だいじょう とど

世親菩薩は本小乗の論師なり。五竺の大乗を止めんが

ために、五百部の小乗論を造る。後に無著菩薩に値い奉

つて、たちまちに邪見を翻し、一時にこの罪を滅せんが

ために、著に向かつて、舌を切らんと欲す。著、止めて云

わく「汝、その舌をもつて大乘を讚歎せよ」。親、たちま

ちに五百部の大乘論を造つて小乗を破失す。また一つの

願を制立せり。「我、一生の間、小乗を舌の上に置か

じ」。しかして後、罪滅して弥勒の天に生ず。

馬鳴菩薩は東印度の人、付法蔵の第十三に列なれり。本

外道の長たりし時、勒比丘と内外の邪正を論ずるに、その

こころげんか と じゅうか しや みずか こうべ は

心言下に解けて、重科を遮せんがために、自らの頭を刎ね

ぎ い われ われ てき だごく ろく

んと擬す。謂うところは「我、我に敵して墮獄せしめん」。勒

びく いさ とど い なんじ こうべ き

比丘、諫め止めて云わく「汝、頭を切ることなかれ。その

こうべ くち だいじよう さんたん みよう すみ きしんろん

頭と口とをもつて大乘を讚歎せよ。鳴、急やかに起信論

つく げしよう はしつ がっし だいじよう はじ

を造つて外小を破失せり。月氏の大乗の初めなり。

かじようじ きちぞうだいし かんどうだいいち めいししよう さんろんしゆう がんそ

嘉祥寺の吉蔵大師は漢土第一の名匠、三論宗の元祖な

ごかい どっぽ まんどうもつと たか てんだいだいし たい いこん

り。呉会に独歩し、慢幢最も高し。天台大師に対して已今

とう もん あらそ じゃしゆう ほんぱ ぼうにん ほうぼう

当の文を諍い、たちどころに邪執を翻破し、謗人・謗法の

じゅうざい めつ ひやくよにん こうとく あいかた ちしや

重罪を滅せんがために、百余人の高德を相語らい、智者

だいし くつしよう

み につきよう

こうべ

りようあし

う

大師を屈請して、身を肉橋となし、頭に両足を承く。

しちねん

あいだ

たきぎ

と

みず

く

こう

はい

しゆ

さん

まんどう

七年の間、薪を採り水を汲み、講を廃し衆を散じ、慢幢を

たお

ほけきよう

じゆ

だいし

めつご

ずいてい

おうけい

倒さんがために、法華経を誦せず。大師の滅後、隋帝に往詣

そうそく

きようしよう

なみだ

なが

わか

つ

こきよう

するに、双足を按撰し、涙を流して別れを告げ、古鏡を

けんけん

じよう

しんじよく

観見して自影を慎辱す。

ごうびよう

めつ

ほつ

かみ

さんげ

業病を滅せんと欲して上のごとく懺悔す。

そ おも

いちじよう

みようきよう

さんしよう

きんげん

いこん

夫れ以んみれば、一乗の妙経は三聖の金言なり、已今

とう みようじゆ

しよきよう

いただき

こ

当の明珠は諸経の頂に居す。

きよう

い

しよきよう

なか

もつと

かみ

あ

経に云わく「諸経の中において最もその上に在り」。

また云わく「法華は最も第一なり」。伝教大師云わく

「仏立宗」云々。

予、随分、大・金・地等の諸の真言の経を勘えたる

に、あえてこの文の会通の明文無し。ただ、畏・智・空・

法・覚・証等の曲会に見えたり。ここに知んぬ、釈尊・大日

の本意は、限つて法華の最上に在るなり。しかるに、本朝

真言の元祖たる法・覚・証等の三大師、入唐の時、畏・智・

空等の三三蔵の誑惑を果・全等に相承して帰朝了わんぬ。

法華・真言弘通の時、三説超過の一乗の明月を隠して真言

りようかい ほたるび あらわ

ほけきよう めり い

両界の螢火を顕し、あまつさえ法華経を罵詈して曰わく

けるん

むみよう

へんいき

じがい

みようご

い

「戲論なり、無明の辺域なり」。自害の謬誤に曰わく

だいにちきよう

けるん

むみよう

へんいき

ほんしすで

ま

「大日経は戲論なり、無明の辺域なり」。本師既に曲がれり、

まつよう

なお

みなもとにぞ

なが

きよ

とう

末葉あに直からんや。「源濁れば流れ清からず」等とはこ

い

にほんひさ

やみよ

ふそうつい

の謂いか。これによつて日本久しく闇夜となり、扶桑終に

たこく

しも

か

ほつ

他国の霜に枯れんと欲す。

きへん

ちやくちやく

まつりゆう

いちぶん

そもそも、貴辺は嫡々の末流の一分にあらずといえど

だんな

しよじゆう

み

じゃけ

しよ

としひさ

も、はたまた檀那の所従なり。身は邪家に処して年久しく、

こころ

じゃし

そ

つきかさ

たいざん

くず

心は邪師に染まつて月重なる。たとい大山は頹るとも、た

たいかい かわ
とい大海は乾くとも、この罪は消え難きか。しかりといえど

しゆくえん もよお
こんじょう じひ くん

も、宿縁の催すところ、また今生に慈悲の薫ずるところ、

ぞんがい ひんどう ちぐ
かいげ ほつき ゆえ みらい く つぐな

存外に貧道に値遇して改悔を發起す。故に、未来の苦を償つ

げんざい けいそうしゆつげん

て現在に輕瘡出現せるか。

か じゃおう しんそう
ごぎやく ひほう にざい まね

彼の闍王の身瘡は、五逆・誹法の二罪の招くところなり。

ほとけ がつあいざんまい い
みて あくそう

仏、月愛三昧に入つてその身を照らしたまえば、悪瘡たち

き さんしちにち たんじゆ の しじゆうねん ほうさん たも か

まちに消え、三七日の短寿を延べて四十年の宝算を保ち、兼

せんにん らかん くつしよう いちだい きんげん か あらわ

ねてはまた、千人の羅漢を屈請して一代の金言を書き顯

しようぞうまつ る ふ ぜんもん あくそう ほうぼう いっか

し、正像末に流布せり。この禅門の悪瘡は、ただ謗法の一科

なり。しよじ 所持の妙法は月愛に超過す。みようほう あに輕瘡を愈やしてがつあい ちようか

長寿を招かざらんや。ちようじゆ この語、徵無くんば、声を発してまね ことば しるしな こえ おこ

「一切世間眼は大妄語の人、一乘妙経は綺語の典なり。いっさいせけんげん だいもうご ひと いちじようみようきよう きご てん

名を惜しみたまわば世尊験を顕し、誓いを恐れたまわばな お せそんしるし あらわ ちか おそ

諸の賢聖来り護りたまえ」と叫喚したまえと、しか云う。もろもろ けんしようきた まも きようかん い

書は言を尽くさず、言は心を尽くさず。事々見参の時をしょ ことば ことば こころ つ ことごとげんざん とき

期せん。恐々謹言。き きようきようきんげん

十一月三日

日蓮 花押

太田入道殿御返事